



【第27号の復習】

大正4年5月31日湯湾集落に生まれた松元辰己さんは、少年のころから好奇心が強く、父親の山仕事の手伝いもよくやっていました。ある時、父親から「山はみんなの宝」と教えられ、山の恵みが宇検村民の生活の支えになっていることを知りました。



戦争中は佐世保の海兵団で勉強や訓練に励み、戦争が終わってから家族で湯湾に戻って来ました。そして持ち前のアイデアと粘り強さを発揮してくだもの作りに精を出し、おいしい見事なバナナを育てました。「くだものつくりの名人」と呼ばれた松元さんは、その方法をみんなに気軽に教えたのです。

1 みんなが喜んでくれたらいい ～信頼が厚く～

働き者の辰己さんは、バナナやシイタケ、ポンカンやタンカンもつくり、宇検村の農業が発展するように全力投球しました。自分のみかん園に「もぎとり園」という名前を付けて、誰でもみかん狩りができるようにしたところ大人気になりました。特に子どもたちに人気があったようです。

「自分は苦勞してもいいから、みんなが喜んでくれたらいい。みんなが豊かで幸せな生活ができたらいい。」といつも考えるようになり、常に研究を重ねながら先頭に立って農業に励んでいきました。

みんなからの信頼はますます厚くなり、区長や農業委員にも選ばれ、農業のことはもちろんのこと村民みんなの生活のことなどを広く深く考えるようになったのです。

2 豊かな村づくりをめざして ～信念と粘り強さ～

辰己さんは村議会議員や助役という仕事を経験した後に、昭和40年に宇検村長に選ばれました。

村長に就任した辰己さんは、村民の豊かなくらし、お年寄り、体の不自由な人々、病気の人々のためになる政治をしようと考えました。まず、道路や港を良くして人々が安全に行き来したり、物を自由に運べたりできるようにしたいと考え、村内一周道路の建設や港の整備をしました。

また、村民が運動をしたり、大島地区の人々が宇検村に来てスポーツ大会を開いたりできるように、

それまでは農地としてだけに使っていた干拓地内に、運動公園を整備（総合体育館、陸上競技場）しようと考えたのです。

しかし、農業用地として埋め立てられた干拓地を、農業以外のことを使うのはなかなか難しく、県はすぐには許可しませんでした。辰己さんは「農業に取り組んでいる農民のために、体育の場（施設）をつくるわけだ。農業以外のことではない。農業と関係があるから是非ともつくらせて欲しい。」と何度も何度も県庁に頼み込みました。

持ち前の粘り強さで、自ら先頭に立って多くの人々に相談や説得をくり返し、絶対にあきらめないで「村民のため農民のためだ」と訴え続けました。その熱意が少しずつ多くの人々の心を動かし、やがて県の許可が下りました。そしてついに干拓地に運動公園が建設されることになったのです。

宇検村の陸上競技場は、鹿児島県で二番目にできた「全天候型（土ではない特殊な材料でできた地面＝雨の日も競技ができる）」の競技場なのです。

3 人間味と仕事への厳しさ ～温厚で誠実～

こうだと決めたら必ずやり遂げようとする強い信念と粘り強さ。正義感が強く、曲がったことが大嫌い。服装や礼儀、言葉遣いのことにも相手やその場のことを考え、絶えず気を付けていました。

「いつも服装をきちんとしなさい。心のこもった言葉をつかいなさい。人の話は真心を込めて（目を見て）聞きなさい。困っている人を協力して助けなさい。」「いつも村民・県民は、公務員に注目しているんだ。きちんとした服装で、心のこもった対応をなさい。」など、仕事をしていく上で、また生きていく上で大切なことを、身近な人たちにやさしく、時に厳しく教え続けました。

4 自然をこよなく愛した人 ～村民を見守るまなざし～

辰己村長が宇検村の森林を絶やさないうために始めた「植樹祭」は、現在も毎年行われています。また宇検村へ入る道路の両側には、村花であるハイビスカスが植えられています。これも、自然を愛した辰己村長の心の表れなのかもしれません。



【村長を6期務め、村民に惜まれ71歳で亡くなった辰己さんの功績を称え、平成4年12月、総合体育館前に銅像が建てられました。】（文責：福田）